

第54回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

日本印刷産業連合会会長賞 印刷・製本特別賞：

『林由紀子作品集 1997-2019』

パルセポネー 回帰する植物の時間』

出版社

レイミア プレス 江副章之介 氏

印刷会社

中野コロタイプ 布下創一郎 氏

製本会社

恩田製本所 恩田則保 氏



©佐藤祐介

●御社の活動について教えてください。

「レイミア プレス」は、主宰者が敬愛する銅版画家アルフォンス イノウエさん、坂東壯一さん、林由紀子さんの蔵書票集と作品集を出版するために、2007年に設立した極めてプライベートな「ひとり版元」です。本好きが高じて設立した版元なので、とにかく自分が気に入った本造りに専念することとしています。それは「美しい本造り」です。本体を構成する表紙、見返し、扉、本文、マージン、奥付等々と函に手間と時間を充分かけて、妥協をしない本造りをするを自分に言い聞かせています。そのためには、私と同じ本造りの考えに共感してもらえる印刷と製本における素晴らしい技能の持主との出会いを欠かすことが出来ません。これまでに上記3名の版画家の本を8冊発行していますが、これからも初心を忘れず「美しい本造り」を続けてゆこうと考えています。

●今回の作品のような造本にされたのは、どういった経緯があったのでしょうか。

「レイミア プレス」では、2010年に林由紀子さんの初めての蔵書票集『プシュケの震える翅』を発行しました。その後も林さんは蔵書票、銅版画、鉛筆画、ペン画などを発表していましたが、最初の本の発行からちょうど10年目の2020年にその後の作品を掲載した本を発行しようと企画しました。林さんのアトリエを訪問し手彩色された多くの銅版画やスケッチ帖を見ているうちに、林さんの全体像が分かるような内容にしたい、という考えが浮かび、すべての蔵書票と銅版画、掲載可能な鉛筆画とペン画、花のスケッチ等々をすべてカラー印刷することにしました。もちろん表紙、見返し、各章の挿画、カットはすべて林さんに描いて頂きました。判型は『プシュケの震える翅』よりも小さく、可愛い大きさに、そして表紙は当初淡色のペン画でしたが、少し華やかに手彩して頂

きました。函は丸背の本体が美しく見えるように、差込口の天地を丸く整形することとしました。函の色は林さんの描く植物の葉の色に合わせた緑系とし、函のタイトルは小さめではありますが、活字で少し深めにくっきりと印刷することで存在感を出すことにしました。基本的には作家の希望を充分取り入れた本造りをやっていますが、印刷や製本の方々や版元の意見も取り入れた本造りをやっております。

●応募したきっかけや、受賞の知らせの感想、周囲の反応など、いかがでしたでしょうか。



函と表紙

江副：造本装幀コンクールのことは以前から知っていましたが、なかなか応募する機会がなく、昨年初めて応募しました。するとコロナ禍のために審査が中止となりましたが、今年も募集がありましたので、昨年に引き続いて応募いたしました。すると6月に入賞のお知らせが飛び込んで参りました。思い掛けない入賞を当初信じられませんでした。メール本文を何度も読んで、やっと本当だと分かり、じわりと喜びが沸き上がってきました。すぐに印刷と製本に携わった方々に連絡し、この喜びを共有することが出来ました。

布下：版元から入賞の知らせが入り、社内全体に

は朝礼で報告しました。特に制作・製造に携わった関係者は技術を高く評価されたことで大変喜んでます。今後の活動に自信が持てます。

恩田：まだ入賞の実感がわきませんが、そのうちドツと実感がわいてくることでしょう。

●作品制作において、こだわった点、苦勞した点、そのほか制作についてのエピソードがあれば教えてください。

「レイミア プレス」の基本は「美しい本造り」です。その本造りに欠かせないのが本文はもとより印刷と製本です。これまで出版した本の印刷と製本に満足することなく、更に美しい本造りをするための印刷所と製本所を探すのに大変苦勞しました。所蔵している画集や図録を調べ、知り合いの愛書家や画廊に訊ね、私の本造りの考えに共感する印刷所と製本所を探しあてるのにかなりの時間を必要としました。しかしその甲斐あって岡山の中野コロタイプの高度な画像処理技術を有する布下創一郎さんと東京都江東区の丁寧で頑丈な帳簿造りの三代目職人恩田則保さんに巡り合うことが出来ました。彼ら抜きで今回の入賞はありえせんし、今回の入賞で彼らとのきずながさらに強いものになりました。

布下：銅版画の繊細な線を、作家の世界観、息づかいが感じられるように表現したいと思いまし



中野コロタイプ 印刷状態の確認

た。慎重に、抜粋した数点でテスト印刷を行い、スクリーニングなどの方向性を決めて、本スキャンに取りかかりました。版画作品が全て革表紙の本に貼り付けられており、スキャンニング作業は困難を極めました。1冊通して統一感が出るように、作品を見ながら調整を繰り返しました。プリントマークなど版画としての立体感を出すのにも苦勞しました。印刷時の立会いでは、繊細な線の



中野コロタイプ 印刷機前での状況

集積である銅版画をリアルに表現するため、特にケントウ※に気を使いました。

※表裏の位置関係や同一印刷面の各色がずれないように、各色版の位置を合わせることに。

恩田：印刷紙面から、印刷の苦勞の息づかいが感じられました。長い年月に耐えられる頑丈な帳簿造りと同じ方法で製本しましたが、作家の林さんの世界観・雰囲気をも損なわないように、柔らかい感覚で包み込まれるような一冊に仕上げるように心掛けました。機械で型押しした函の差し込み口の天地のアールに本の背のアールを合わせるのに少し苦勞しました。

●電子書籍が広がる中で、紙の本への思いや良さなど、お聞かせください。

本はただその内容を読めばそれで終わり、というものではありません。文字を目で追うだけでなく、本に触れ、表紙の紙や布や革、本文紙の手触りに心を動かし、表紙の革や本文のインクのおいをかきながらページをめくる音を聞く。そして心で文章を味わう。五感のすべてを満足させるのは電子書籍ではなく紙の本なのです。

そして「美しい本」はその本が一冊あるだけで、知的内容満載のオブジェともなります。私はそのような本造りをこれからも、本造り仲間の協力を得ながら続けてゆきたいと思っています。

ルリユールや希少本の世界には、大量生産大量廃棄ではない五感で感じる本の世界があり、そこに紙の本に対する希望を見出しています。(了)